

# 神磯郷土誌

工藤 浄真

## はじめに

一昨年度より利尻町内の各地域の集落誌を取り上げ研究調査をし、その結果を報告してきたが本年度は神磯(ベョウタンケウシ)について報告する。

この報告についての内容は調査の限界、また、資料不足等の事情があって十分なものとは言えない。

特に移住開拓の年代についての調査には多くの困難が多く、推定、推測という判断より他なく、他の集落に比較しては早い年代と考えられる資料がある。

## あらまし

神磯は西に隣接する長浜(ホマワンド)と東に境界を接する政治との間に位置する、約1軒程の東西間の小集落で仙法志地区中最少である。

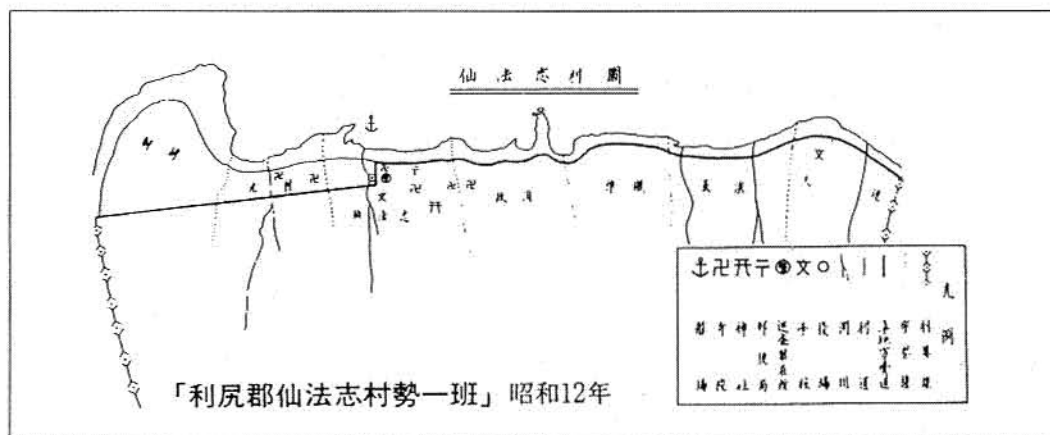
ここの居住者は移住当時より、久連、長浜両集落の住民とは異なり、一部利尻西部よりの移転者を除き、鬼脇、仙法志の旧両村の各集落から再来住者が多く、従って生活圏もこの両村であった。

祖先並びに居住者の出身県に於いては定住し、そして、集落が次第に形成されるに従って集団化されており、どの集落よりも定住率が低い。

この集落も同様に移住当初より、疎定置建網漁業への雇用労働者が殆どで、以前の職業は必ずしも漁業者ではなかった。

鯨漁期以外は自給自足の畑作農業、森林伐採等で生活を支えていた者が多く、大半は零細漁民で占められていた。

近年は、昆布、ウニの採取のみの漁業者であり、この漁期間内に於いても土木建設へ労働者になっており、中年労働者は他の集落に比して若干多いものの、過疎化現象は最も進んでいる。



## 1、地 域

### (1) 地名地形並びに気象

この集落の地名には2つの由来がある。無論現在の地名（集落の呼び名）神磯と言われる前の、ペョウタンケウシの呼び名である。

1つには、『「ペョウタンケウ」は瀬川の意味で、「ウシ」は湾形の事で……』と言う古老の話がある。

2つには、ペョウタンケとは「婦女が揃って声をはりあげて呼ぶ」ことで、「ウシ」は場所を表す。ペョウタンケウシとは、帰船を迎える処、救いを呼ぶ処、または、合図をする処の意。

アイヌは歓迎の時にペウタンケをしたものだが、また、不時の変のある時、もしくは敵に襲われたときなども多数のメノコ（女の子）を岩頭に立たせ、その鋭い声を利用して、仲間を呼び集めたものだという……。それが遂に地名になったものだとされている。

ペョウタンケウシから神磯へと変わった年代は不明ではあるが、おそらくは昭和12年の地番改正時と考えられる。また神磯という名の意味は、戦後までペョウタンケウシ→ペョウダケシと一般に呼ばれていたが最近では言う人がいない。

地域の範囲は現在の藤井富太郎氏宅より石橋昇氏宅の間をいう。

海岸線に沿って町道と道道があり、家屋もこれに沿ってある。この間に2つ空川及び沢があり、従って橋も2か所ある。

海浜の澗から言うと田の澗から竹部の澗に至る地域である。

地形は長浜のように屏風状の断崖は小さく段丘となっていて、浜は両端は岩浜で澗があり、中間は石の浜である。

段丘より麓までの一帯は原野状態で樹木が散在する程度で森林はない。麓は近年の植林が進み、エゾヤトドの各松や白樺が目につくようになった。他は根曲がり竹が密生している。

気象条件は仙法志地区内殆ど長浜と変わらないが、地形に差違がみられる。

東の風（ヤマセ）はこの地で終わり、偏西、北の風は久連、長浜ほどではないがこの地点で幾分か弱い。

その反面に降雪量の多い年は丘から吹き嵐された雪が家屋を埋める場合もある。

時化については集落の両端に岩石海岸があって風向を遮る位置にある為に、それ程の大波にならない。それは南、北西等の風の場合で、海に出漁する漁夫にとっては若干有利である。

### (2) 移住年代とその経路

開拓移住の最初の年代は利尻島中の集落では最も遅いが、仙法志地区内としては明治初年に溯る事ができ、比較的早い。

古文書によると明治12年3月31日利尻郡戸数表によると、「字ペウタンケウシ本籍者一」とあり、また、明治17年の利尻郡戸数表中にはペウタンケウシが表記され、既に本籍、寄留各一とあるが場所の特定と居住者氏名が認定できない。

現存する資料から推測されるのは、今井和助氏先代の三之助氏、次に年代が下がって、横野馬吉氏、そして伊勢力蔵氏等が最初の居住者と考えられる。

更に、今井和助氏古書に見られる鯨定置建場所申請書には既に、鬼脇村在住の巻淵雄作、須藤万蔵両氏の鯨定置建場があった事から、この両者をも考慮する必要がある。

既報告の通り、明治23年以降定住者が急増している事から、この地域の定住者も増加したものと考えてよい。

移住者の経路は殆どは旧鬼脇村の各地域からの再移住で若干は旧仙法志村東部からである。

更に出身県別に、明治31年から5年間の来住者（定住者並びに寄留者を含む）をみると、ベウタシケウシには126名であった。

即ち、秋田衆が32名、津軽衆が21名、越中衆が10名、越後衆8名、加賀衆6名、宮城、山形が各4名、福井、岡山の各2名、岩手、愛媛、茨城、東京、栃木、群馬、広島の名1名で、後は道内30名、島内7名になっている。

このようにこの集落に於いても秋田衆が最も多く、津軽衆が次に多くなっている。

特徴的な点は因幡衆が皆無であり、越中衆がやや多く、越前衆が意外に少なく、越後衆は他集落に比しては多い。

また、大正7年に100戸の民家も現在では26戸に激減している集落で、今後も過疎化は進む状況にある。

### (3) 1年間の暮らしのあらまし

ここに転住し居を構えた人々は特に定着性がなく、職種も多く、百姓に木挽、そして、大工・石工・桶屋・葺屋・とび職等で鯨漁業に従事しながら生計を立てていた手間取漁夫であった。

#### 1) 春

約1軒間の距離に3か統から4か統の鯨建網漁場があった。殆どの住民は何れかの漁場に属し、袋引き、沖揚げ、身欠、魚粕などの作業に、また関連する職の専属雇用として働いた。

自家営業の刺網漁者は少なく、戦後になって独立業者は増加したが、薄漁から皆無に終わり多額の借金を背負い苦しんだ。

ホマワンドに近い所の住民はホマ拾いをして生計を補った漁民も若干いた。

#### 2) 夏

鯨場が終わり製品を出荷し終わって郷土祭典を待つ。これは6月中旬のことである。

年間の収入の大半を占める鯨漁収入は大きく、また、支払いさえも多額に上がり、年2回に収支決算が行われている最初の時で、景気、不景気の胸算用の白黒の1年の決着がつく時期である。

お祭り終わって自給自足用のジャガイモ、カボチャ、豆類などの畑作業に精を出す。

畑作業が終わって昆布の採取準備で、澗や干場作りの仕事が始まり、7月下旬から昆布漁に入

り、その合間をみては大根蒔きが行われる。

9月一杯まで続く昆布漁期間中、畑の手入れ、昆布作り、検査そして出荷、一段落して秋の作物の取り入れ作業と重労働が続く。8月中旬のお盆の行事はどんなに忙しくともきちんといわれたのである。

### 3) 秋

秋の取り入れが終わって、天草採り、そして鮑漁が始まる。

また、この時期は冬期間中（越冬という）の食物、燃料の貯蔵の作業が行われる。ジャガイモ、キャベツ、豆類、カボチャ、大根等、自宅の地面を掘った穴蔵に、そして畑土盛貯蔵、漬物（鯨漬、魚の飯鮓）などがあり、燃料にする薪材、根曲がり竹の竹切、石炭などの準備作業、家屋の中に入る雪や風を防ぐための冬囲いが雪の降るまで続く。

### 4) 冬

年内は鮑漁やタコ漁が続き、年明けて海藻類の採取して生活費を補い、他はまだ来る鯨に夢を馳せたのである。

山林の伐り出しは自家用の燃料とした。また、1、2軒ながらこの地域で鱈釣業者もいた。

この集落も何遍かの大吹雪に依って家屋が埋没されて建物を守る為の雪掘り作業が繰り返された。

道路は雪で遮断され、井戸から飲料水の汲みかつきは困難になり雪を溶かして使用した。

概して一般に春をじっと待つ生活であった。

### 5) その他

この集落の住民は一般に物心両面に於いて大変厳しいものがあつた。

日常生活に欠かせない飲料水は全部井戸水を利用する他なく、ここでは6か所井戸があつた。現在の場所で表すと次の通りである。

水道施設付近 旧竹部漁場番屋の井戸

寺田宅付近 旧北野屋漁場番屋の近く

田中良一宅付近 中田宗吉沃度製造用

藤井敏幸宅側 旧安江漁番屋の近く

中島義實宅側

旧林かね漁場番屋内の井戸

このように漁場中心が多く、比較的近距离間にあつたが冬期間に何遍かは大吹雪の為に利用できなくなり不便を極めた。

また、銭湯風呂もなく、マサンドマリ、マオヤニへ通わなければならなかつた。個人的に私宅に風呂のあつたのは数える程しなかつた。

昭和45年にこの地域の山麓良質の水源が発見され、同50年に簡易水道が完成して各家庭に於ける生活が改善された。

(4) 道路 (交通)

神磯地域内の道路は平で道々と町道の分岐点の道々の坂道の外になく、家屋の立並ぶ所には坂はない。

中間に2か所の橋があって丸太橋であった。過去何回かの改修工事が行われたが神磯橋は神磯川に昭和44年10月完成し、待久橋は無名川に昭和49年3月に完成し、現在の鉄筋コンクリートになった。何れも空川である。

また、水源地の簡易水道施設に至る山道の約2軒は西端部にあり、東端部道々より墓地を経て火防線に至る山道があり、天然記念物「千島桜」へもこの道を通る。

年間に何回かの大時化による道路への波も近年進んだ護岸工事の完成によって解消された。

バスは道々と町道を運航し、2か所の停留所があり、沓形市街へ約8軒、仙法志市街へ約3軒の距離にある。

(5) 治安及び医療

稚内警察署管内仙法志警察官駐在所の所管内であって、仙法志地区集落皆同じである。旧仙法志村開村当時以来変わっていない。

医療については開村時より旧仙法志村役場所在地に村医診療所を設置して以来、この地域の住民は診療を受けてきた。変遷については第8集で報告した通りである。

2 産 業

(1) 漁業

他の地域と同様に漁業に従事した。

この集落内には5か統乃至は4か統の鯨定置建網と番屋があった。

建網場所の位置は旧仙法志村東第34号より44号で、毎年着業したのではなく休業をした場所もある為にその実数は一定しない。

漁権者、漁権譲渡人、漁権借受人等が毎年のように変動し、常に一定していた業者は限られている。神磯内に於ける経営着業者の氏名を上げると次の通りである。

	大 正 3 年	大 正 7 年	昭 和 23 年
第34号	今井三之助	今井 和助	駒井 島蔵
第35号	今井 緑一 (長谷川十一郎)	竹本清次郎	太洋 漁業
第39号	安江 鉄弥 (池田斌太郎)	池田斌太郎	石倉 喜七

第40号	桐山 サヨ (北野定次郎)	北野定次郎	宮松亀次郎
第44号	(竹部 丈平) 大村 浩	竹部 丈平	山田 善吉

第34号漁場は明治20年から大正6年まで三之助氏、以後大正12年まで和助氏が続き、三郎氏と父子3代続いたが合同漁業会社に参加し、不漁と事情があって昭和5年後まもなく、この土地を去り故郷秋田に帰った。

この場所で長浜でも漁場経営をした初馬鹿造氏が2～3年、そして、干場勝三郎氏1年間経営し、大島虎次郎氏1年、後に駒井島蔵氏が昭和10年から昭和30年までの着業であった。

第35号は大正3年以前鬼脇在住の巻淵雄作氏とある外は不明である。大正7年の竹本氏以後は竹本勝次氏が昭和20年までの経営になっている。大正初期、長谷川十一郎氏も一時経営したことがある。

終戦後は大洋漁業会社の経営に移り、青森市より支配人が派遣されていた。この場所は合同漁業に参加せずに昭和30年の鯨漁皆無時まで続いた。

今井の新場と言われた39号は前村長の池田斌太郎氏が着業したのは村長退職後まもなくである。それ以前は不明である。安江氏は鬼脇在住者の漁権者で一時田中房治氏も着業し経営した事がある。

池田氏以後は北野定次郎氏の代行着業もあり、以後、増田、岩下の両氏に移り、数年間の休業もあって、石倉良二、喜七の手に移された。

戦時中から終戦時には、米脇、大森、桧森の各氏の共同で斉藤岩吉氏着業したが、戦後石倉喜七氏の後に竹島末吉氏で鯨漁皆無の時までである。また、この時期は石倉氏を除き元村の在住である。理由は不明である。

第40号の場所は、鬼脇村桐山氏が漁権者で、北野定次郎氏が経営に当たり、数年間続いたが、平田、岡田、田中の各氏等が一時的に代行着業した事もあり、休業年もあって絶えず変動が繰り返された。

戦後になって宮松亀次郎氏が経営に当たったが豊漁することなく終止符を打っている。

第44号は神磯に居住する田中房吉氏が漁権者並びに着業経営した漁場である。

しかし、その後、漁権が砂田弥一郎、鬼脇の大村浩の両氏に移転し、また、田中氏となり更に鬼脇の安江氏と移動した場所である。

実際の着業経営者は田中氏と変わらなかったが、同氏逝去後は同漁場帳場をしていた同県人である竹部文平氏が、これを継承して大正末期まで着業した。

この年代に入って鯨漁の不況もあって休業もあり、西田松次郎氏の経営となり、再び漁権が安江氏に移り、西田熊三郎氏の着業となった。

昭和に入って更に不況悪化して村有財産となり、昭和6年に合同漁業会社に参加した。その後は長浜の柴田作五郎氏、マオヤニの駒井島蔵の名義により、山田善吉氏が昭和19年に経営に当たり、

鯨漁終末まで続いた。

合同漁業会社に加入後の柴田氏までの間の昭和17年頃までは詳細不明である。

#### ○各漁場の位置

第34号の漁場の位置は政治ワンドと神磯の入り口の境界に当たっている。

普通に今井の番屋と呼ばれて、今井氏が大正8年に築設した、今井の澗が現在も残っている。岩石を利用して造られた袋澗兼舟入澗でそれ程大きいものではない。

この澗は近年に修築されて広く近隣の人々に親しまれて現在利用されている。

第35号の漁場は今井の番屋の両隣に位置していて、澗（カクナカイチ）または、「はやしかね」と言われていた。

袋澗は番屋正面にあって細長く連なった岩石を利用して造られた澗で小さい。

今も壘の澗と言われて、近くの神磯の漁民が利用している。

第35号の番屋は現在の道々と町道の分岐点のやや西側の道路の浜側にあった。

利用された澗は神磯全体の湾形状の中間にあるが澗といえない程の澗で、「青山の澗」と呼ばれていた。

平らな岩石海岸で、舟の出入と係留に利用され、鯨は枠取りだったという。

第40号の場所は現在北辻氏宅の浜側に番屋があり、寺田氏宅の前浜の北野屋の澗と今も言われている澗で、大きく築設工事の跡もないが、北風を防ぐ位置で条件に恵まれ、小さく細長い澗で近在の人々が利用している。

第44号の澗は「竹部の澗」と言われて現在もそのまま残っており、神磯の西端にあって付近の人々がこの澗を現在利用している。

大正8年に竹部氏が周囲の岩石を利用して修築したもので、神磯では最も良好な澗である。

番屋は現在の石田新作氏宅の西隣にあった。

鱈釣漁業に於いては旧仙法志村は副業的なもので漁業者の一部に過ぎなかったが、当地域では大正年間に北出惣五郎氏らが着業した。

冬期間のスケソウダラ漁は鯨漁皆無後に神磯でも数年着業したが数年で不漁となり、春鮫漁も一時盛況を極めたが、何れも昭和40年頃までに終息している。

天草、若芽等商品価値が落ちて採取者がなくその他の海藻類もまた同じである。

現在の漁業は神磯の場合も昆布やウニに依存している。ここ10年以来養殖昆布事が盛んになって幾分か安定した収入をみるようになった、天然昆布は年々減少傾向にある。

ウニの増養殖に重点をおいている状況にある。

#### (2) 商工業

○商店は佐々木長太郎、三ツ野亀松、井上歳次郎の各氏等の菓子商があり、荒物雑貨商の北出惣五郎、吉田朝治の各氏で、何れも大正年代より昭和の初めまでであった。山本辰見氏は昭和に入って戦前まで菓子商があった。



しかし、戦後は1軒の商店もなく、佐々木實氏が最近まで漁組購買部の委託販売をしていた。

#### ○沃度製造業

利尻島内で数少ない沃度の製造を創業した人は、難波多吉氏が明治29年に母液製造に着手し、難波氏に次いで中田宗吉氏粗製沃度の製造をした。大正年代より井上齊二郎氏はマヤヤニ在住の西田松二郎氏の投資に依り、藤井幸右エ門氏がこの仕事に従事した。

西田氏専属の元村在住の寺崎馬車屋が沃度原料の運搬に当たっていた。しかし、当時の大不況と戦時色の強化によって、昭和10年頃に約40年間続いた操業が終わっている。

養蚕を手がけた業者が副業的に当時仙法志村に29戸あったが、この地域にも何軒かあったと考えられるが、具体的なことは不明である。

戦後の昭和55年の9月30日より、吉田欽哉氏は土木建設業を開始し、事務所及び倉庫を有し、殆ど年間操業し数10名の人夫を雇用し島内全域を範囲として事業をしている。

戦後、大工さんが多く出て各自治会中割合にして最も多い。山本隆夫氏、寺田信行氏は請負建築業に従事している。

藤井信行氏は藤井潜水工業を創業し、水産関連の事業を経営している。ここ数年来の事である。

藤井富太郎氏昭和30年代より鍛冶業を始め現在に至っている。

現在、工業に関連する仕事に従事している人全員が漁業を主とするもので、これらはあくまで副業的なものである事は言うまでもない。大正年代にはソバ屋豆腐屋があった。

### (3) その他

明治40年代に鯉不況に副業を奨励して、当時仙法志村には29戸の養蚕業者がいた。

久連、長浜同様に何戸かの養蚕者がいたものと考えられるが、本調査では不明である。

また、不況時の明治後半、戦前戦後、家畜の飼育をも行ったが何れも副業的なものであって、昭和40年代に入って止めてしまって現在は1戸もない。

農業も1年の暮らして述べた通りで、現在は更に縮小されて畑作をしていない家庭がある。

## 3. 行政組織

### (1)

現在の神磯は開村前は第5区ベウタンケウシと称し、責任者を組長と呼称した。

開村時より第5部ベウタンケウシとし、責任者を部長と呼んだ。以後、昭和3年9月に再び区としたが、昭和15年12月28日より部落会設置規定を設けて、単にこの時より神磯部落会に改めた。

昭和22年5月3日町内会部落会等に関する法令第15号により自治会制に改正されて、責任者を部落会長から自治会長と呼ぶようになった。

次に歴代の責任者即ち、組長、区長、部落会長、自治会長を記録すれば、

明治33年～大正5年5月20日まで（収入役）初代組及びに区長小山内雄太郎、

大正5年5月21日より大正9年11月29日まで



(村会議員) 2代部長 北野定次郎、  
大正9年11月30日より同11年7月6日まで  
3代部長 北野 秀作  
大正11年7月7日より昭和17年1月31日まで  
(村会議員) 4代部長部落会長 竹部 文平  
昭和17年2月1日より同19年12月31日まで  
5代部落会長 田中 康三  
昭和20年1月1日より同23年12月31日まで  
(村会議員) 6代自治会長 山本 良吉  
昭和24年1月1日より同32年12月31日まで  
7代自治会長 田中 康三  
昭和33年1月1日より同34年12月31日まで  
8代自治会長 吉田 忠  
昭和35年1月1日より同49年12月31日まで  
9代自治会長 辻 七郎  
昭和50年1月1日より同60年12月31日まで  
10代自治会長 水巻 千代太郎  
昭和61年1月1日より同63年12月31日まで  
11代自治会長 佐々木 伴一  
昭和63年1月1日より現在  
12代自治会長 水巻千代太郎

以上の通りであるが隣接長浜に比して再任期間が長期間に亘り、その任を果たしている事は信望の厚かった人物への信頼性と神磯住民の団結心の表れとも言える。

昭和15年に部落制度にしたのは戦時体制の強化を目的とした再組織強化によるものである。

昭和17年2月1日選任

会長 元青年分団長 後に町議員他	田中 康三
総務部長	水巻柁太郎
教化部長 後に農業委員	花田伊勢蔵
産業経済部長	田中 清三
警防部長 後に消防団幹部	石橋浅次郎
衛生部長	落合 彦松
森林防火部長 漁組幹事他 後に村会議員	山本 良吉
統後奉公部長	山下菊次郎
經理部長 元青年分団長	鈴木 春吉
第1隣係班長	山下菊次郎

第2隣係班長 後に民生委員	元井 柁太郎
第3隣係班長 後に民生委員 自治会長	吉田 忠
第4隣係班長	宮松 龜次郎
第5隣係班長	水巻 柁太郎

これを更に同年内の12月31日に再任し、更に、同18年12月31日に再組織し選任している。

部落会長 村会議員 漁組理事	山本 良吉
総務部長	寺田 豊作
教化部長	寺田 豊作
納税部会計部長 後に民生委員他	元井 柁太郎
産業部経済部長	宮松 龜次郎
警防部長 農業委員	花田 伊勢藏
健民部長	中島 時太郎
森林防火部長 後に町会議員	田中 康三
社会部、銃後奉公部長	山下 菊次郎
婦人部長	吉田 サダ
第1隣保班長	榎山 貞吉
第2隣保班長	秋元 勇太郎
第3隣保班長	藤井 耕作
第4隣保班長	鈴木 政太郎
第5隣保班長 自治会長漁組理事	辻 七郎

以上のように衛生部を廃し、新たに五部を設けて指揮命令の一本化を狙ったものに変更されたのである。

当時仙法志村常会が設けられて毎月25日を定例会としていたが、各部落会長が会員として出席していた。

そして戦後の法令改正により、自発的自主的でしかも民主的な自治会が生まれて現在に至っている。現在の自治会組織は

自治会長（元自治会長）	水巻 千代太郎
同副会長（会計書記兼務）	元井 亥七
第1班班長	元井 亥七
第2班班長	吉田 欽哉
第3班班長	寺田 信行

以前は5ヶ班あったものを戸数の減少によって、3戸班に再編成したものである。

## (2) 神磯内に於ける旧仙法志村及び利尻町議会議員名とその期間

小山雄太郎 明治35年4月1日より同年8月20日まで（収入役就任）

田中 房治 明治39年5月30日より43年5月21日までの2期

青山 浅吉①明治37年から1期2年間

②明治43年5月22日から同45年5月21日までの1期

竹部 分平①明治45年5月22日から大正3年5月21日までの1期

②大正7年5月22日より同11年5月21日までの2期

③昭和7年5月22日より同14年5月21日までの2期

白川 亟太郎①大正11年5月22日より同14年5月21日までの2期

②昭和7年5月22日より同12年4月16日までの1期半

吉田 朝治 大正15年5月22日より昭和2年5月21日までの1期

山本 良吉 昭和15年5月22日より同32年5月31日までの5期（昭和31年9月15日町村合併により任期間変更）

田中 康三 昭和32年6月1日より同36年5月31日までの1期

吉田 欽哉 昭和57年10月8日より現在までの2期目

以上のように田中氏即ち昭和36年5月まで開村以来連続して議員を出していたが、これ以後約20年間出でおらず過疎化の一つの現象となって表れている。

その後、吉田氏（漁組理事、吉田産業社長）が初当選し現在に至っている。

### (3) 方面委員並びに民生委員

地域住民の生活の安定と向上を目的として設けられた、この地区委員は次の通りである。

民生委員元井 柁太郎 昭和23年7月より同46年12月までの9期24年間。

昭和47年より担当地区の神磯は政治に合併変更され、以後委員は出ていない。

### (4) 学務委員並びに教育委員

学務委員

小山内雄太郎 明治33年より大正5年までの16年間

白川 亟太郎 昭和5年より同12年までの7年間

この後は出でおらず、昭和27年発足の教育委員も同地域から出なかった。

### (5) 社会教育委員

新学制による社会教育の発展向上を期す目的で設置された委員にはこの地域では次の通りである。昭和8年12月25日より任期2年として発足した。

榎山 貞男 昭和29年3月より昭和31年9月14日まで

吉田 忠 昭和33年9月より同39年8月まで

### (6) 農業委員

戦後の農地法改正による農地委員並びに農業委員には次の各氏である。

山本 良吉 昭和22年8月22日より同38年7月21日まで

吉田 忠 昭和26年7月22日より同56年7月21日まで

花田伊勢蔵 昭和38年7月22日より同50年7月21日まで

佐々木 實 昭和59年7月22日より現在

戦前では大正4年当時、仙法志農会として小山内雄太郎氏の名が見られ他は不明である。

#### (7) 各種委員

##### ① 消防関係

大正年代には仙法志村消防組があって、各字を第1部から7部までとしていた。それで各字に部長をおいた。

戦後の消防設置条例による消防委員には、山本良吉氏、昭和30年5月より町村合併時の昭和31年9月までで、以後は出ていない。

②固定資産評価審査委員には、元井征太郎氏が昭和30年12月より同31年9月まで。

##### ③漁港審議会委員

吉田 欽哉 当初より現在

辻 七郎 当初より昭和49年12月まで

元井征太郎 昭和38年より同46年まで

##### ④小山内雄太郎

収入役として、明治35年9月30日より大正3年9月26日までの約15年間、開村当時より務め、その他に於いても村有志として信望があった。

その外の行政各種委員会委員は省略した。

## 4. 産業経済団体組織

### (1) 仙法志漁業共同組合

山本 良吉 戦後 期間不明

寺田 孝 期間不明

辻 七郎 昭和27年4月より同31年3月までの2期4年間

寺田 忠 昭和31年4月より同48年3月までの6期17年間

吉田 欽哉 昭和51年4月より現在

明治時代から終戦時までには調査未了であるが、田中房吉、竹部文平の各氏の他に横野、白川、北出の各氏等が大きな影響力を持っていたものと考えられる。

(2) 森林愛護組合

戦前は森林防火組合が組織されていたが、昭和10年以後に各部落内に統合して、森林防火部として部落会長の指揮下においた。

それまでの役員名は不明である。

森林防火部長 昭和17年2月 山本 良吉

森林防火部長 昭和18年12月 田中 康三

戦後は森林愛護組合と組織替えになり、一村連合体としての中にある。

吉田 忠 会長 村評議員

辻 七郎 副会長 同評議員

これは昭和30年代中頃のものである。

田中 正氏は辻氏の以後である。

何人かの交替があったが現在は下記の二氏が当部落出身の幹部となっている。

石橋 昇

藤井富太郎

(3) 納税貯蓄組合

当組合は戸数が少ないために一組合を以て組織され、仙法志納税組合という連合体に含まれている。

組合長 仙法志納税組合役員 吉田 忠

副会長 (死亡) 山本 辰見

理事 (死亡) 田中 久治

理事 寺田 忠

理事 辻 七郎

監事 (死亡) 落合 彦松

監事 村椿 義雄

以上の役員は殆ど老齢化または死亡し、現在は、

第1納税貯蓄組合 組合長 藤井幸三郎氏

第2納税貯蓄組合 組合長 佐々木 實氏

になっている。

(4) 水難救済会

他の自治会同様の組織体となっている。

昭和28年に辻 七郎氏宅連絡所の他は不明である。

現在の所員としては、組長藤井信幸、田中良一、藤井 司、山本隆夫の各氏等になっている。

## (5) 消防関係

全村的な消防組が発足したのは大正2年3月であるが、明治38年12月8日に仙法志第5共成組が結成された。

これは青年団体の組織だったが消防が一つの目的であった。

大正に入って防火組合が全村的に設けられ、昭和の戦時体制となって部落会組織内に組替えされた。戦後は消防団として新発足した。

共成組 明治38年12月8日 神磯青年団

消防組 大正2年3月21日 防火組合

警防団 昭和10年10月10日 部落会

消防団 昭和22年8月より現在、4分団4部同地域内の消防幹部名を列举すれば次の通りである。(不明な部分がある。)

明治時代 村上 弥六 大正5年4月まで

大正時代 高橋 定吉、北出惣五郎

昭和戦時中 石橋浅次郎、花田伊勢蔵

第4部長 藤井幸三郎、副部長 田中定雄、藤井敏幸(現在)

第4分団長 藤井幸三郎 昭和51年4月より同56年3月まで

利尻消防団副団長 藤井幸三郎 昭和56年より同60年3月まで

この地区にも消防器具が置かれていたが、昭和52年8月31日に器具置場が道々と町道の分岐点の浜側に設置された。(団員8名)「火の見やぐら」は現在の吉田産業事務所の丘にあった。

## 5. 文化団体関係

## (1) 青年会

宗谷管内では最初に設けられた青年会組織が生まれたのは、仙法志村字ベウダケシ第5部である。仙法志第5共成組、字ベウダケシ、明治38年12月8日の創立。

団員数、53名。年齢範囲、17歳以上40歳迄。大正5年度予算、60円。資産は35円。質素儉約を趣旨としている。

また、前述のように火消役が2つの目的を持ち、事実上の消防の性格を兼備えた青年会であった。従って村内に於いても最古の消防団体と言ってよい。

また一方では当地域単独で実施された祭典の主役として活動したものであった。

二組の樽御輿の参加、相撲大会、小屋掛芝居の依頼興業など重要な役割を果たしたと言われ、祝宴の豪快さは青年達は無論地域総動員の賑やかさがあったようである。

初代組長 村上 弥六、大正5年4月まで

2代組長 高橋 定吉

3代組長 北出惣五郎

大正9年に仙法志青年団に一本化され、神磯青年分団として改組され、戦争遂行の一端を背負う

事になった。

吉田良吉、田中康三、鈴木春吉氏等の後に分団長として昭和16年頃、田中 正氏、代分団長 戦時中 水巻千代太郎氏であった。

終戦後は青年の自由意志による民主的な青年会が発足した。仙法志連合青年会の下に各字単位の青年会が一斉に誕生した。

昭和21年2月に神磯青年同盟会は男26名、女9名、計33名の会員数を有する青年会として結成された。

趣旨は引揚者、入稼漁夫の慰問、芸能大会の開催、郷土祭典（樽御輿）への協力、そして教養の向上を計る事であった。

初代会長 落合 鉄男 （連合会役員）

2代会長 初山 貞夫 （連合会長、社教委員）

3代会長 辻 忠敬 （連合会役員）

副会長 石橋 隆、神田 浪子

昭和37・8年になって過疎化が進み、会員数も減少して、昭和40年頃にはこの会も自然消滅した。青年会館の建設はなかった。

## (2) 婦人会

他地区と同様の経過である。

昭和17年5月16日現在の愛国婦人会役員には次の名が見られる。

幹 事 竹部 きよ 大正7年6月より

評議員 元井 スマ 昭和13年7月より

国防婦人会役員

班 長 竹部 キヨ 昭和11年3月より

評議員 山本ミツヨ 昭和11年3月より

評議員 元井 スマ 昭和11年3月より

理 事 山下 シマ 昭和11年3月より

大日本婦人会仙法志支部 昭和17年6月15日結成

参 与 田中 康三 神磯部落会会長

審議員 竹部 キヨ 愛婦幹事、国婦班長

元井 スマ 愛婦国婦評議員

山本ミツヨ 国婦評議員

山下 シナ 国婦理事

班 長 吉田 サダ、副班長 北出 幸

各組長 本田 アヤ、山本 キリ、田中イワエ、寺田 たき、辻 ヨシ

戦後まもなく誕生した民主的な仙法志村婦人会がある。



昭和20年代の役員は調査未了の為に不明であるが、昭和33年以降をあげてみよう。

理事 山本みちよ、吉田 さだ、

昭和40年には

部長 藤井 みよ

役員 寺田 初江、池上 エツ、

昭和42年には

理事 藤井 みよ、(部長) 山本オサメ

実行委員 笠島 トヨ、竹部フサエ

昭和47年

部長 宮松 和枝、理事 山本きり子、

昭和49年に部長には佐々木キヨである。続いて、佐々木夫人の各氏らになり、各字と同様に50年後半に消滅した。

昭和50年代 花田 ナツ、 藤田 つる

○漁業共同組合婦人部については調査不十分なために不明である。

村内各字に各委員をおいて漁業従事者として、また、貯蓄に関する意識を高めている。

昭和3年に発足した女子青年団は戦争遂行の目的の一環としたものであるが不明である。

愛国婦人会は明治38年に国防婦人会は昭和11年に結成され、戦争遂行一環を担う大日本婦人会仙法志村支部に編成替えされた。

### (3) 体育協会

一村一団体の体育協会は各地区より理事を選出して運営に当たった。任期は2年間とした。

理事 昭和30年代

石田政春、石橋 昇、鈴木日出博、辻 忠敬

理事 昭和30年後半

石橋 昇、北辻末松、池上 繁、北島正利

現在は体協地区理事役員として

藤井 信幸(野球部長)、田中正弘、佐々木勝人、佐々木隆敏の各氏がなっている。

### (4) 自治会館

戦後は一時的に神磯神社に間借りの状態であったが、原田氏宅を譲り受けて使用した。それは昭和40年代になってからの事である。

その後に自治会館を新築したが老朽化と狭い為に昭和63年6月に現会館が町の助成を受けて新築された。

自治会内に各種行事等あらゆる催しに利用されている。

## (5) 村役員

現仙法志神社は明治40年5月に元村より移転奉祀されて以来、旧村内七部より氏子総代を選出している。

竹部文平 明治40年5月より昭和20年までの40年間

吉田 忠 昭和20年代より同40年代

元井証太郎 昭和40年代より

宮松政雄 昭和50年代一期間3年

藤井富太郎 現在

この他に神社委員を若干名を出している。

戦時中の名前を見ると各氏等である。

田中康三、北出惣五郎

また、村社の郷土祭典には総代、委員が出任して行われている。

## (6) 遺族会関係

この地区での戦没者は全員が太平洋戦争での犠牲者である。無論、仙法志遺族会の組織内にある。

戦没者

元井友太郎 昭和14年7月15日、満州遺族 元井証太郎氏

石田 作一 昭和17年5月27日、満州遺族 石田 信義氏

佐々木文雄 昭和20年6月20日、沖縄遺族 土屋とめ氏（不在）

土屋 亀松 昭和20年6月22日、沖縄遺族 土屋徳松氏（不在）

鈴木 正一 昭和20年2月11日、軍属遺族 鈴木政太郎氏（不在）

以上の通りであるが、佐々木、土屋、鈴木の遺族三氏は既に転出して不在である。また、家屋も残っていない。

## 6. 教育

### (1) あらまし

この地域の通学区の学校は仙法志小中学校である。学校から約3軒で距離的には遠い地点で冬期間通学に多くの困難があった。

終戦時までは初等科、高等科は同一校であり、戦後の中学校への通学は小学校卒業生がそのまま全員であった。

また、保護者会、PTAの関係では遠く不便なために三役など、特別行事以外は余り選出されなかった。

### (2) 保護者会並びにPTA等

保護者会では昭和14年頃に竹部文平氏が副会長のようであったが他は不明である。

戦後のPTAでの小学校関係の三役では、

副会長 山本 辰見 不明

副会長 元井 征太郎 昭和40年4月より昭和46年3月までの3期6年間

会長 寺田 信行 昭和59年4月より昭和63年3月まで

仙法志小学校70周年記念協賛会では、

副会長 田中 康三、総務 山本 辰見

(昭和37年11月22日施行)

仙法志小学校80周年記念協賛会

顧問 辻 七郎(自治会長)

副部長 元井 征太郎、石橋 昇

(小学校47年9月14日施行)

仙法志中学校PTA関係では、

監事 竹部 輝男 昭和36年4月より昭和38年5月まで。

副会長 藤井 つる 昭和48年4月より同54年3月まで

昭和53年9月に施行された30周年記念行事関係については未調査である。

同窓会は昭和61年4月に新発足した。

会長 藤井 信幸 昭和61年4月より現在

昭和32年2月10日に小中学校PTA組織が各々分離独立して単独PTAとし発足以来、各々1期間2年、各自治会が4名の役員を選出したが、児童生徒の減少も次第にあって殆どの会員は交替制で役員になっている。

数十名いた児童数は現在は5名になった。明年度は僅か1名となり、将来新入学児童の見込みが全くない。

生徒も現在は1名であって明年度には5名になる。これらの生徒が卒業すると小学校と同様に遠い将来に亘って児童及び生徒が1名もいない地域になってしまう。

この地区から2人の教員が出ている。

田中 信一先生と寺田 数枝先生である。田中先生は校長となったが昭和40年後半に死去し、寺田先生は仙法志、久連、沓形の各小学校に勤め、昭和55年頃退職して札幌に転出しこの地を去った。

昔よりのこの地域での小学校、中学校の児童生徒は勇敢な者が多かったが、殆ど転出してしまい、現在では往時を偲ばせるだけになっている。

## 6. 人口の変化

当地区の人口の変動の状況を見ると、旧仙法志村総人口全体の割合は高い時で約10%から低い時の5%弱と著しく大きい。これは他の地域にない特徴をもっている。

その傾向はなお続くと考えられる。比較的年代的に早く、明治10年代の移住とも考えられるのに反して、一通過点の定住性に乏しい寄留者が多かったとも言えない事もない。

島内での移住経路は殆どは鬼脇村であり、一部沓形村新湊と仙法志村東部である。

次に当地域の最大戸数並びに人口の大正7年の定住者名（寄留者を含めると120戸余りと言われている）と、激減の昭和15年、そして現在の居住者を掲げてみたものである。

26戸の中老人夫婦だけの家庭6戸。老人1人だけの家庭3戸ある。

戸数の割合には40歳代の家庭も意外と多い地域である。

このように最高、最低の人口の変動の割合は4分の1になっており、昭和15年の現在数の36戸に減少しているのは

移転出者の大半は樺太である事が判明した。

番号	大正七年	昭和15年	現在	出身県
1	中山 安蔵	中山 安蔵	なし	新潟県
2	山下菊太郎	山下菊太郎	(本町在住)	石川県
3	佐々木長太郎	佐々木長太郎	佐々木伴一(石工、柵屋、菓子商)	秋田県
4	土屋 徳松	土谷 徳松	(小樽在住)	秋田県
5	大田宗次郎		なし	道内
6	北出惣五郎	北出清一郎	なし(雑貨商)	福井県
7	横野 馬助	(樺太へ)	なし	青森県
8	太田 宗助		なし	道内
9	横野 与吉	(樺太へ)	なし	青森県
10	横野 猛	(樺太へ)	(沓形在住)	青森県
11	中田幸次郎		なし	道内
12	工藤 亀吉		なし	青森県
13	浅村 古市		なし	不明
14	棚山五三郎		なし	秋田県
15	元井八次郎	元井八次郎	元井証太郎(柵屋)	富山県
16	田中 力蔵	(樺太へ)	(稚内在住)	青森県
17	小山内ソダツ		なし	青森県
18	山本喜和松	山本 良吉	山本 隆夫	岡山県
19	米坂 由蔵		なし	道内
20	伊原 金蔵		なし	山形県

年次	仙法志村		神磯地区	
	戸数	人口	戸数	人口
大正5年	680 <sup>戸</sup>	3,216 <sup>人</sup>	101 <sup>戸</sup>	人
大正10年	730		64	
昭和10年	487	2,843	48	280
" 13年	493	3,118	47	286
" 17年	455	2,867	37	233
" 25年	526	3,528	45	314
" 30年	526	3,492	46	322
" 35年	560	3,035	52	259
" 40年				
" 45年	477	2,308	36	126
" 56年	403	1,222	31	100
" 63年	382	1,044	28	87
平成元年	377	986	26	84

仙法志地区戸口の推移

21	川崎金次郎		なし	青森県
22	工藤又五郎		なし	(秋田県)
23	葛西 清三		なし	青森県
24	新木 長松		なし	不明
25	榎山 貞蔵	榎山 貞吉	(札幌在住) (桶屋)	秋田県
26	中島時太郎	中島時太郎	中島 義實	福井県
27	佐藤 新吉	佐藤 新吉	佐藤 ミヨ	秋田県
28	小山内くら		なし	青森県
29	太田 宗吉		なし	道内
30	青山 浅吉		(札幌在住)	青森県
31	笠島栄三郎	(樺太へ)	笠島栄蔵	青森県
32	中沢重次郎		なし	秋田県
33	尾島浅次郎		なし	道内
34	井上菊次郎	(井上才次郎)	なし	岡山県
35	加藤金五郎	加藤金五郎	なし(東京へ)	秋田県
36	後藤 千蔵	(沓形へ)	なし	秋田県
37	藤井幸右工門	藤井 耕作	藤井幸三郎	広島県
38	田中 久松	田中 清三	田中(良一)	青森県(南部)
39	中島清三郎		なし	青森県
40	工藤 豊吉		なし	青森県
41	吉田徳太郎	(樺太へ)	なし	(秋田県)
42	吉野 徳治		なし(舟大工)	秋田県
43	秋元勇五郎	秋元勇太郎	秋元 初(柁屋)	青森県
44	北野定次郎	(留萌へ)	(留萌在住)	青森県
45	池田 三蔵		なし	(新潟県)
46	吉田 米松	(樺太へ)	なし	秋田県
47	佐藤 三蔵		なし	(秋田県)
48	吉田 朝治	吉田 忠	吉田 欽哉(雑貨商)	小樽
49	伊勢伊勢松	花田伊セ蔵	(小樽在住)	青森県
50	伊勢 力蔵	(樺太へ)	なし	青森県
51	門間 ミツ		なし	(秋田県)
52	三ツ野亀松	(樺太へ)	なし(菓子商)	不明
53	浅野 健吉		なし	新潟県
54	村山 松平		なし	不明
55	佐藤 粕吉		なし	青森県

56	工藤富太郎		なし	不明
57	藤木弥三郎		なし(ソバヤ)	不明
58	五十嵐準三郎		なし	道内
59	富田 政吉		なし	道内
60	白川覚次郎		なし	富山県
61	白川亟太郎		なし	富山県
62	原田 長松	(樺太へ)	なし	秋田県
63	木村 清吉	木村 友作	(札幌在住)	青森県
64	高橋 タカ		なし	不明
65	佐藤 多吉		なし	青森県
66	吉田 由松	(樺太へ)	(秋田在住)	秋田県
67	岩井 ヤキ		なし	秋田県
68	鈴木松五郎	鈴木 春吉	(政治在住)	新潟県
69	白金清太郎		なし	富山県
70	宮木清太郎	(礼文へ)	なし	〈富山県〉
71	滝田 伝七		なし	〈富山県〉
72	寺田常次郎	寺田常次郎	吉田 信行	富山県
73	石田 こな			(福井県)
74	村椿春次郎	村椿春次郎	村椿 義雄	富山県
75	沢木源次郎		なし(大工)	(富山県)
76	星井由五郎	星井 勇作	(沓形在住)	富山県
77	宮松太郎兵衛	宮松亀次郎	宮松 政雄	富山県
78	難波 多吉		なし(沃度製造)	不明
79	五島 晋吉	(樺太へ)	(釧路在住)	小樽
80	池田 浅治		なし	道内
81	高橋 定吉		なし	山形県
82	相馬栄太郎	(沓形へ)	なし	富山県
83	大谷佐兵衛		なし	新潟県
84	黒井 政吉		なし(ソバヤ)	宗谷
85	寺島 キヨ		なし	富山県
86	辻 トメ	石田トメ(与作)	石田 信義	(福井県)
87	井城 ヨキ	井城キクイ	なし	富山県
88	鈴木市太郎	鈴木政太郎	(稚内在住)	青森県
89	佐々木吉松		なし	秋田県
90	田中 キク	田中 キク(康三)	(東京在住)	新潟県

91	池ノ上音松	池ノ上繁太郎	池上繁太郎	新潟県
92	藤谷三次郎		なし(豆腐屋)	不明
93	辻 惣吉	辻 惣吉	辻 七郎	小樽
94	高井三次郎	水巻柝太郎	なし	石川県
95	真鍋 ハヤ		なし	香川県
96	竹部 文平	竹部 文平	(札幌在住)	新潟県
97	宮田 富蔵	宮田 富蔵	なし	道内
98	小倉 西松	(樺太へ)	なし	青森県
99	花田由太郎		なし	青森県

番号	大正 7 年	昭和 15 年	現 在	出 身 県
		鈴木 モヨ	なし	
18	山本喜和松	山本 辰見	なし(稚内)	岡山県
		水巻柝太郎	水巻千代太郎	石川県
(政治)	藤井 末吉	藤井 利吉	なし	福井県
		石橋浅次郎	石橋 昇	道内
(本町)	寺田芳次郎	寺田 孝	なし	富山県
		落合 彦松	落合 鉄雄	(富山県)
77	宮松太郎兵衛	宮松梅次郎	なし	富山県
37	藤井幸右エ門	藤井 幸作	藤井 敏幸	岡山県
37	藤井幸右エ門	藤井 幸作	藤井 信幸	岡山県
(久連)	北辻与惣松		北辻 末松	福井県
38	田中 久松	田中 清三	田中 一男	青森県
38	田中 久松	田中 定雄	田中 良一	青森県
38	田中 久松	田中 正	田中 正弘	青森県

番号18は分家したものであり、藤井利吉氏は田中力蔵氏樺太への転出後の家屋に引っ越した。寺田氏は現寺田氏を頼って樺太から終戦に来住したが昭和四十年代に転出した。

77は宮松氏の分家で羅臼に移転したので、現宮松氏はその甥に当る。

37は分家し、現藤井氏はその後を継ぎ、更に分家し、現在は同子孫3戸居住している。

北辻氏は親戚関係である石橋への縁故で久連から来住者である。

38は田中久松氏の子孫関係の分家である。

以上その経緯を話したが、この年代だけに限ると青森出身者が多く、次に秋田県出身者である。しかし、一方では戦前の樺太への転出者も多く、現在は僅か2軒であり、秋田県出身者もまた同様である。



従って、富山、福井の各県出身者が多く8戸となっている。

出身県の不明者が多いのは移転出者が多いために調査の手係りがなかった事にある。

## 8. 宗 教

神磯地区も他の地区に比較して大差はない。しかし、特徴的な事は昔より地域集団としての神社を創建して現在に至っている点と、一時的ではあるが、真宗大谷派説教所があった事である。

### (1) 太平山三吉神社

昭和12年の記録に依るとこの神社の創立年代は、明治30年5月15日とあり、昭和14年の記録には明治40年10月とある。

これは、秋田県由利郡平沢村出身の今井和助氏が明治20年に現在の政治と神磯の境界の地に移住開拓に当り、鍊建網三か統を経営に当たった人の故郷より招来した祭神が発端であると言われている。

創立年代の一致しない点があるが、何れにしても当時の仙法志村内の各地区より、最も早い部落神社の創立である。

ここに住む人達の信仰的心情の結集として表われたもので、現在に至るも自分達の神社として、神であるとの信仰は変っていない。

主祭神は「三吉さん」で、貧乏であったが無類の豪傑な人物であった神として崇敬されている。

本宮は秋田市赤沼の太平山三吉神社で、神札やカレンダーが毎年配布されている。

神磯の太平山三吉神社は字神磯127番地にあつて、石碑、鳥居、祠堂(7坪)がある。

秋田県特有の信仰であるが、この地区は秋田衆ばかりでなく、他の東北、北陸地方出身者も多いが全員が信仰者になっている。また、政治、長浜にも信者があり、神磯自治会として維持運営されている。

祠堂内に寄進物も多く、「マサカリ」、「キセル」、太鼓、賽銭、曼幕、提燈、すだれ、時計、大ワラジ等がある。

寄進者名は、梅田長五郎、辰五郎、白金清太郎、田中康三、長谷川忠、神磯婦人部、石橋昇、元井征太郎、池上繁太郎の各氏等の名前がみられる。

大正年代から昭和初期にかけての祭礼行事が賑やかに行われた。

幟が立ち、樽御興が出る、相撲大会、田舎芝居、出店が立ち並び、子供の相撲大会も行われて、今日の子供相撲大会の初まりである。

このような時代には、横野与吉という人がいて、元旦に裸一貫で大ひょうたんに日本酒を入れ、「三吉さん」の御神酒を神磯の一軒一軒に配って歩いたものだとの話は有名である。

今も、「三吉さん」はタバコが好きだったという事で護符として配られている。

大晦日から元旦にかけての「御神酒あげ」が現在も続いており、自治会内班単位が当番になって行われ、また、「三吉さん」の豪快さを象徴する、「三升餅」が供えられ、神磯的人情味が見受けられる。

昭和12年当時には、代表者が竹部文平氏崇敬者67名で部落全員での寄付の維持になっている。昭和14年は崇敬者代表吉田忠氏で以後（戦後）も同様に自治会中心に維持されている。

神磯三勇士と言われた、竹部文平、白川丈太郎、横野与吉の各氏等の豪傑、知慧者、雄弁の名士として慕われ、語りつがれている。

また、北野秀策、山本良吉、吉田朝治、忠親子、田中房治、康三の親子、北出惣五郎の各氏等多士済々であった事が偲ばれる。

## (2) 大谷派説教所

明治36年頃に佐々木順導という1人の僧が篤信者の協力の元に開設した佛堂である。

師は新潟県出身者で、当時、鯨建網の久連の加藤幸助氏の漁場に漁夫としての出稼ぎであったという。

故あり縁あって出家得度し、加藤幸助氏が後見者として、ベウタンケウシ在住の同県人田中房吉、竹部文平の両氏と協議し、協力を得て、現在の辻宅の山側の丘に小さな建物を創建し、真宗大谷派説教としたのがその起源である。

明治39年6月7日、仙法志村字ベウタンケウシ486番地に寄留届出とあり、「新潟県刈羽郡荒浜村263番戸ヨリ」になっている。

明治37年分報告記録の同38年の村政の書類に「鬼脇村、田中加啓、佐々木某なり、真宗大谷派信徒、本村字ベウタケウシに説教場を建設したら、右の内小職の督励に応じ寺号公称の出願をなしたるもの、真宗大谷派一、目下出願準備取運中のもの真宗本願寺派一。」になっている。

しかし、現西円寺は明治38年に建立されて真宗信者の多くが檀徒になった事と、また、鯨不況の為の信者の転出者の増加の2つの事情によって、遂に閉鎖の止むなきに至り、現南浜に移転し、同説教所の開設している。昭和45年に鬼脇市街の真立寺に統合廃寺された、正徳寺であり、現に同師の子の墓が残っている。

現在、仙法志地区内の鬼脇真立寺檀徒である何戸かはベウタケウシの説教所時代の信者である。どの位の年数存在したのか、また何年に同地を去っているかは不明である。

## (3) 宗教各宗派信者

①長浜地域と同様に仙法志市街地に建立されている各宗教教派に属している。

秋田県出身者の殆どは曹洞禅宗（広鏡寺）信者が多く、富山県及びその隣接出身者は殆ど真宗大谷派信者（西円寺）が多い。

青森県出身者と秋田県出身者や他の一部は浄土宗信者（専称寺）である。

真宗本願寺派信者（竜雲寺）は各県に亘って散在し、真宗高田派（授法寺、昭和63年廃寺）信者はなく、また、他の佛教各宗派信者もいなかった。

さらに、天理教信者も若干あり、昭和に入ってからのものである。

## ② 各宗寺院総代

この地区からは次の各氏等が各寺院の総代及び代表的な有志として維持運営に当たっている。

曹洞宗 広鏡寺

小山内雄太郎 創立時より大正3年5月の死亡まで

この間は本町在住者でこの地区はいなかった。

佐々木伴一 昭和63年より現在

浄土宗 専称寺

今井和助、三郎 創立時より大正13年まで

吉田朝治、忠、鉄哉 創立時より現在まで(親子三代)

特に、西円寺、龍雲寺、授法寺の各寺院の総代及代表者はいなかった。

## ③ 共同墓地

現道々町道の分岐点から約100米程東寄りの山道に登る事また100米の地点に神磯の共同地がある。

墓は政治の西端一部と共同の場所である。点在していて、小樹木の陰になり、無縁のものあり、移転したもの等があって、一見した処余りよく判らない。

### 9 小部落の特色

他の地域のように小部落の呼称はなく、一部落単位そのものが一体となった特色が見られる。

しかし、3つの小部落があって詳細には各々に特色がある。

第1の集落は東端の集落で現在の自治会内の第1班の所に当る。大正7年代では約30軒の戸数があつて道路を挟んで山側や浜側にも家屋があつたという。

青森県出身者が最も多く、次ぎに秋田県で福井、石川の各県で岡山県出身者もいた。

現在居住者の他に、中山安兵衛、安蔵、土屋徳松、太田宗次郎、北出惣五郎、清五郎、横野家の3軒、中田幸治郎、工藤亀吉、浅村古市、靱山五三郎、靱山貞蔵、貞吉、貞夫、田中力造、小山内の軒、山本喜和松、良吉、良夫、花田由太郎、米坂由蔵、伊原金蔵、工藤七五郎、葛西清三、新木長松の各民家があり、佐々木、北出の2軒の店もあつた。

すぐ近くにあつた今井、㊸大洋の各漁場で働く人が多かつた。

現在、青森県出身者は1人もいない。殆ど昭和13年前後樺太に転出したといっている。

第2の集落は現在の第2班を中心とした所で、現在の神磯橋の周辺である。

青山浅吉、中沢重次郎、尾島浅次郎、井上菊次郎、歳次郎。加藤金五郎、後藤千歳。中島清三郎。工藤豊吉。吉野徳治。北野定次郎、池田三蔵の各家屋で、現在の藤井氏宅山側に吉野大工屋があつて、橋のすぐ側に利尻では古い沃度製造業者の中田宗吉氏から井上歳次郎の小工場があつたという。現在の田中良一氏宅の所である。

また、藤井氏宅の近くに北野屋という鍊建網親方宅があつて、その前が小さな広場になつてい

て、盆踊りが立ち、若い男女の交際の場ともなり、1つのカップルも生まれたという。

ここも青森県出身者が多いが現在2戸のみである。

第3の集落は現在の第3班に当る所が殆どである。現在の持久橋から神社の下の周辺で、第1、第2の各班の範囲より広さが大きい。

ここの集落は富山、新潟、秋田の各県の出身者が多く次に、青森県出身者で他の2班とは違っている。

○現在の吉田氏宅の近くには吉田米松、佐藤三蔵、伊勢伊勢松、伊勢力蔵、門間ミツ、三ッ野亀松、浅野建吉、村山松平、佐藤柏吉、工藤富太郎、藤木称三郎、五十嵐準三郎、豊田政吉、白川寛次郎、原田長松、木村清吉、高橋タカ、宮本清太郎、佐藤多吉、吉岡由松、岩井セキ、鈴木松五郎の各氏の民家で神社前にも何軒かの家があったという。

ここには、吉田、三ッ野の各氏の商があったという。雑貨と菓子の商いで、あったようだ。

○現在の無名川周辺とその沢などの所には、白金清太郎、滝田伝七、寺田常次郎、石田こな、村椿春次郎、沢木源次郎、星井由五郎、宮松太郎兵衛、難波多吉、五島晋吉、池田浅治、高橋定吉、相馬栄太郎、大谷佐兵衛の各氏の家屋があった。

現在の寺田氏宅の近くの空地では盆踊りもあって賑やかだったといっている。

この沢の奥にも鈴木市太郎、政太郎。星井白金の各氏の家屋が5、6軒あったという。

また、この橋の西の浜側には、北野氏経営の番屋があった。

○西端の集落には、田中房吉、キク、康三、池上音吉、佐々木吉松、藤谷三次郎、高井次三郎、真鍋ハヤ、竹部文平、宮田富蔵、小倉酉松の各氏宅に寺島キヨ、井城ヨキ、黒井政吉氏らの民家があったと言われている。

また、この当時以前にはホマワンドにも家屋があって神磯に入っていた。最盛時には120戸近くの戸数を誇ったと伝えられているが、現長浜の東端に居住する人々は、ホマワンドにいた人が殆どであり、この地も神磯に入っているために、それを入れるとその数になる。

○明治30年代より鯉建網を経営した田中房吉、定吉、キク、康三の各氏の親子の居宅と番屋があった。

経営者の変遷も多かったが袋澗は今も「竹部の澗」として残っており、多くの漁民に利用されている。

○本報告8号でもふれた通り、沓形の新湊から「ホマ」を頼りに来た漁夫が多かった。不漁時には再び新湊に戻った人もいたが、踏み止まった人々も多い。これが神磯に富山県出身者が多い理由となっている。

## 10、 風俗習慣

ここは昔より豪傑な人が多かった事で知られ、団結心の強いところでもある。

神社に年末年始の催し、6月の祭典行事への協力体制がよく、自治会内の争い事は余りみられない。

その事は、自治会、漁業協同組合、学校、寺院神社等に関して任用期間が長く、小さな問題に対してはあまり問題にはしない。

昔、先祖達は辛惨な生活経験をした苦勞の蓄積が人柄を温厚なものにしているようである。風俗は「三吉さん」信仰行事からくる生活様式が全体に均一化されている。

## 11、 主な出来事

自然災害はここも同じである。

- 大正5年4月29日の建網の海難事故で漁夫29名の死亡者の出たことは人々の知るところである。
- 三吉神社は3回ヤマセ（東）の強風で吹き飛ばされている。前2回の災害の年月日は不明であるが、3回目は昭和48年6月であった。
- 戦後（年月不明）であったが子供の行方不明事件があったが未解決のまま終わっている。
- 雪解け水による氾濫で神磯川（空川）周辺民家が被害にあった。
- 昭和58年春の乾燥時期に2戸全焼という火災があった。
- 昭和63年6月神磯端付近で車による人身事故が発生した。
- 昭和60年11月3日付で、藤井幸三郎氏は消防団入団約50年と部長、分団長、副団長の功と消防活動の実績を認められ、勲六等単光旭日章を受章された。

## 12、 終わりに

盛況時の最多戸数は村内各部落中第1位であったが、現在は最少戸数第1位である。

戦後の一時は回復したが往時の半分に充たなかった。

それは戦前の不況時に新天地を樺太に求めての転出であった。終戦となって再び利尻に戻り引揚げてきた人達である。それも現在は1戸だけの居住者で再び東京へ、札幌、小樽へと転出した。

秋田県出身者が多いという事だったが、調査していく中に未了部もあるが、青森県出身者が以外に多かった。

無一文な零細漁民は生活に困窮したが、それだけに身軽に転出し去る事が以外に容易であったのかも知れない。

漁のない漁村の姿は悲惨である。どこまで過疎が続くのだろうか。

この調査に協力を願った方々

元井証太郎、藤井幸三郎、辻 七郎、吉田鉄哉の各氏等。

参考文献（資料）

旧仙法志村行政資料		利尻町史編集室蔵
“ ” 社寺明細帳	明治37年以降	利尻町史編集室蔵
宗谷管内拓殖要覧	大正5年編	利尻町立博物館蔵
利尻町立博物館年報第3号		利尻町立博物館



神樂の太平山三吉神社に奉納された絵像板

0 1 2 3 4 5





④大洋漁業で使用していた罾の洞（神磯の東端）

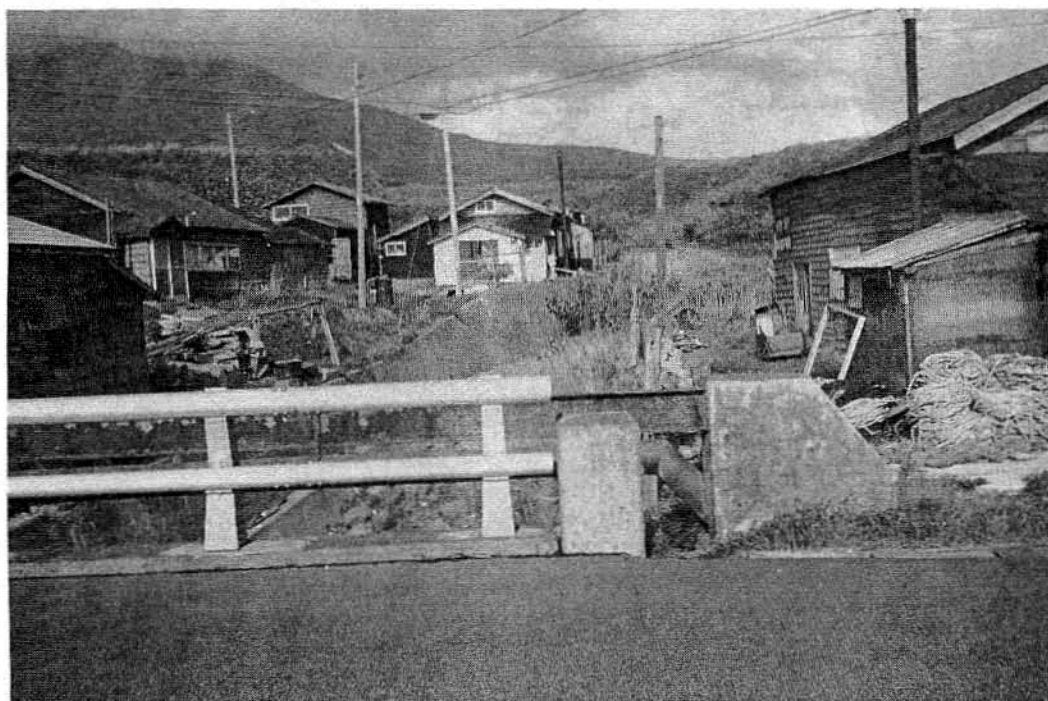


神磯東端の集落（罾の洞に近い）





町道と道道の分岐点近くから見る神磯（西側）



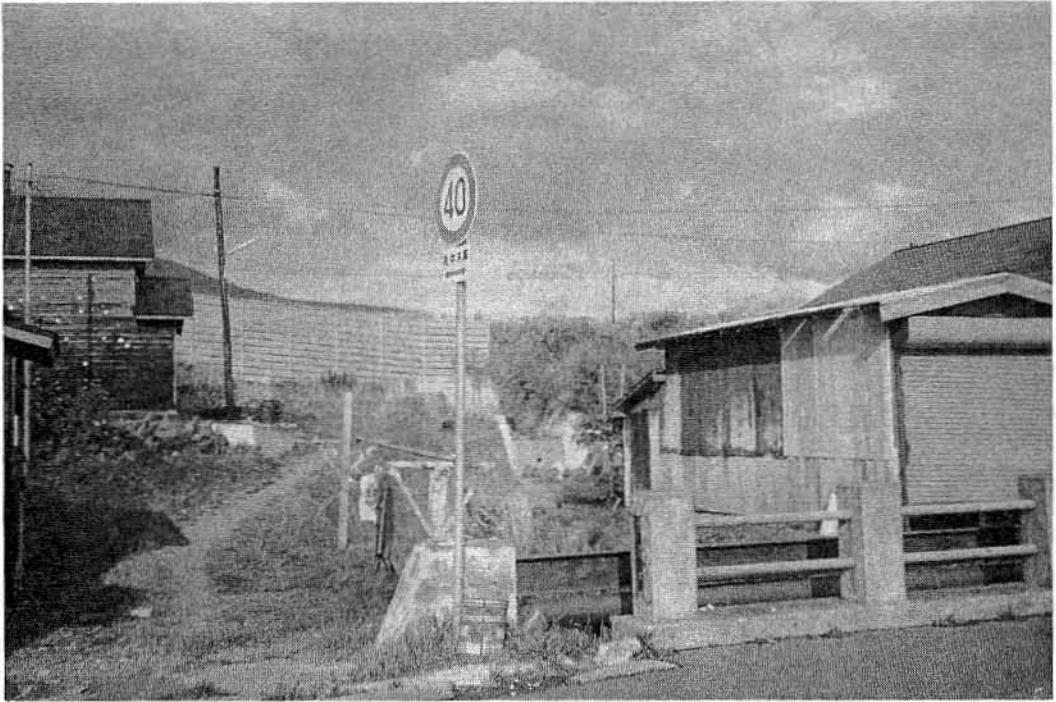
神磯橋とその沢（ここに沃度製造工場があり、盆踊りも行われた）



左、吉田産業事務所 右、神磯自治会館（昔この裏の丘に「火の見やぐら」があった）



神磯の三吉神社（旧仙法志村では最古の創立である）



神磯西側にある無名川と沢。ここに6戸の民家があった。



昔ここに北野屋の練番屋があり、浜は北野屋澗である。





竹部の澗(神磯の西端)



政泊1部との神磯共同墓地(現在13基に減少している)